

# 2024年度 佐久長聖中学校 自己評価

目指す学校像	教育理念「自由と愛」のもと、生徒一人ひとりの個性を尊重し、楽しく充実した学校生活を通して、生徒たちが魅力的な人間に成長できる環境整備を積極的に推進する。
--------	--

重点目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>魅力ある授業を生徒に提供できるための教科指導の研鑽に努める。</li> <li>生徒の進路実現に向けて、進路指導体制の発展に努める。</li> <li>生徒との前向きな対話のある生活指導・学級運営を行う。</li> <li>心身ともに健康で明るい学校生活をが送れるよう、生徒の人権を尊重し安心安全な学校づくりを進める。</li> <li>学校の教育活動を生徒や保護者、本校志願者、地域に対し、幅広く情報発信を行う。</li> </ol>
------	---

評価
A: 十分
B: 概ね十分
C: やや不十分
D: 不十分

	評価項目	評価の観点	評価	具体的取組状況・成果	課題・問題点
1	学習指導 進路指導	生徒の学ぶ意欲を引き出し、主体的に取り組む態度を育む授業が行えたか。	B	■一方的な説明を避け、なるべく説明を短くして、生徒の考える時間・相談する時間を増やすように心掛けることができた。■ICTの活用、主体的に学ぶことを基盤として、グループワーク・記述式を取り入れつつ、授業を行うことができた。■生徒の興味を引き出して取り組めるように視覚教材・ICTを工夫してできた。■パワーポイントによるスライドを使用して、教科書・資料集等に掲載されていない情報をビジュアル的に提示することで、生徒の関心を喚起しようとした。また、事象の因果関係・意味等を重視して、教科書の行間を意識させることができた。■ICTを利用した授業で、効率よく授業を進めることができた。	■進度を気にしてしまって、生徒同士の話し合いや探究するような時間をほとんど取ることができなかった。■生徒が自らが課題を見つけたり、取り組んだりする姿勢を育む仕掛けがさらに必要だった。■やる気を持ち、円滑に学ぶ姿勢が見られず、意欲的でなかった生徒もいたので、一人一人に応じた授業展開が必要であった。■生徒の実情の把握と授業準備の不足を感じた。■本来であれば、授業時間内に走る・跳ぶなどの基礎的な動きを入れていくと技術の向上がさらに図ることができたと思う。■美術に苦手意識を抱えている生徒の指導が難しかった。■ICTを利用した授業で集中できない生徒が多数いた。
		問題発見力、課題解決力、表現力、コミュニケーション能力を養う授業を展開できたか。	B	■普段の授業から自分の考えや事柄の内容を文章で表現できるように授業プリントを工夫したり、毎回の考査問題にも記述問題を取り入れたりしてきた。その効果もあって、記述問題に答えられる生徒が増えた。■表現力の仕方を授業内で継続的に指導してきた結果、記述問題に対する苦手意識が軽減されてきた。■数学の言語化を意識してきたため、言葉を使って相手に説明できる生徒が増えた。■土曜日等の特別授業的な時間で、グループワークや話し合い、タブレットを用いた探究活動を行って、生徒が主体的に取り組む姿勢を引き出すことができた。■生徒同士で問題・課題に対して積極的に討論する姿勢が見られるようになった。	■生徒は自分で問題を発見することができない場面が多くて、その点が課題であった。■与えられたことに対しては、できるようになってきたが、自ら発見して、課題を解決していくとなると今一步であるために、その取り組みが課題であった。■年々隣同士で話し合うというようなコミュニケーションが取れず、仲の良い人としか話せない生徒が増えており、それをどのように改善していけば良いかが難しかった。■ロイロノートで課題に取り組ませて提出させるなど、生徒がICT機器を使って主体的に取り組む場面を作っていくべき。■学力の低い生徒と共有意欲的に取り組めるように、課題の内容を精選することが今後の課題であった。
		生徒の希望進路を実現するために、大学入試についての研究を行い、生徒個々に対応した指導が行えたか。	B	■教え子の進学した大学の情報を生徒に話すことで、大学進学に対する意識を高めることができた。■高校内容に入って、授業の応用問題(チャレンジ問題)として大学入試問題を扱ったために、意欲の高い生徒にとっては、良い刺激になっていると感じた。■将来や大学入試への意識付けとして、先輩方の話や入試の話や授業内で伝えるなど意識させることができた。■大学入試での出題内容を意識した授業展開・授業内容を盛り込むことができた。■入試制度の変化について、自分自身でなるべく研究して、大学入試に関するさまざまな情報を提供することができた。■懇談会等で保護者・生徒と共に希望進路について話し合うことができた。	■高校の先生方との意思相通を図ることが難しいが、高校の先生方との学習会が必要である。■高校の先生方や大学進学に近い先生方との情報共有を大切にしていけることが必要である。■大学入試の研究に必要とされる確かな時間の確保が現状できておらず、高校の先生方と情報共有を図る努力も自分自身ができていなかった。■先輩などに直接話をもらう機会があれば良かった。■大学進学への思いが漠然としているために、指導が不十分であった。生徒たちに将来を考える機会を増やしていくことが今後の課題である。■紹介する大学が限定されていたので、より多くの大学についても紹介していくことが必要であった。
		大学のさらに先を意識しながら進路を考えられるようなキャリア教育や進路指導を実践していたか。	B	■職場体験を通して、生徒たちは、さまざまな仕事を体験することができた。また、希望進路に向けて、どのような学部・学科が関係しているかを説明することができた。■職場体験・探究活動の指導を通して、これから必要となる物事の捉え方・思考・発表の方法等を生徒と共にお互い深めていくことができた。■現代において必要とされる人材、将来において必要とされる人材とは何かを学級で考える場面を設けて、HRで自らの考えを伝えたり、学級通信を通じて伝えたりすることができた。■社会人として活躍している教え子たちの様子を話すことによって、さまざまな職業に関心を持たせることができた。	■学校全体で考えた際には「キャリア教育」とは何か？これから先の時代に生きる生徒に持たせるべき力とは何か？という部分が共有されていないために、生徒によって感覚の違い、学びの違いが生じているように感じた。■教科の授業だけでは、実際にできるキャリア教育・進路指導には限界があると感じた。■授業内でも将来につながる教育・指導をもっと行えると思うので、生徒が授業内容を自分と大きく関わる問題として捉えていけるように工夫していきたい。■職場体験前後に、継続的に将来を考える指導が足りていなかった。■日々変化していく社会情勢の中で、より新しいものを生徒にどう発信していくかが課題であった。
2	生徒指導	校内外問わず、いじめ・暴力・SNSトラブルなどのない安心・安全な学校生活を送るための啓発活動を行い、情報収集を行えたか。	B	■生徒への聞き取り・保護者対応は丁寧に行うことができた。また、報告・連絡・相談も怠らずに行うことができた。■いじめ等のトラブルが発生した時に学年で協力して事実確認をした上で、適切な指導を行うことができた。■学年の先生方と情報共有を適切に行うことができた。■授業中・授業前後・休み時間等に、なるべく教室や廊下にいる時間を作って、生徒の様子をよく見るようにしていた。また、学年の先生方との情報共有を密に行うことができた。■学年・学級に自らの考えを役職の立場に応じて伝えることができた。また、公民の授業では、SNSに関する啓発をしながら、身近な危険性を考えさせる授業を実施できた。	■問題が発生した時に、もっと早く対応をしていれば良かったと思う。また、ご意見に対してもクラス・学年の職員だけで対応できないものもあった。■学校全体として、安心・安全な学校生活を送るための啓発活動・情報収集の徹底が行われているかどうかの再検討を行うべきである。「予防」「対応」を含めた学校内での共有のマニュアルも必要である。■トラブルを未然に防ぐという観点で、対策・手立てを含めた啓発活動がさらに必要であると感じた。■多様化する個々の事案への対応が必要である。■学校アンケートの実施の頻度を高める。■スマホ・タブレット端末の適切な使用方法のルール作りを考えるべきである。
		生徒に体罰や暴言と捉えられるような言動を行わなかったか。	A	■毅然とした姿勢の中にも冷静沈着に柔和で穏やかな態度を心掛けることができた。■生徒の発言・行動については、自分自身が興奮することがないように冷静かつ誠実に対応することで、生徒ともコミュニケーションを図ることができた。■授業でも個々のやり取りでも、生徒と接する時の言葉掛け・態度が、乱暴なものや時代にそぐわないものにならないように注意した。■生徒の立場に立って、適切な言動を心掛けることができた。	■自分自身の発言が、意図せず生徒の心を傷つけることもあるために、常に反省している。また、軽はずみな発言を気を付けるように心掛けている。■毅然とした態度で対応することも時に必要であると思うが、曖昧になってしまった部分もあるので、今後改善したい。■生徒の心情に寄り添う姿勢、生徒の将来を開拓できる助けとなるような話し方を習得したい。■生徒の予期しない言動にどのように向き合い対応するかを考えていきたい。
3	保護者連携 地域連携	保護者や外部からの声に対してきちんと対応・返答できたか。	B	■保護者からの補習等の要望に関しては、きちんと対応することができた。■保護者には状況をしっかりと説明することで理解を得ることができた。■対話を繰り返し、お互いの理解不足の部分の解消に努めることができた。また、Classiなどでこちらの方針を伝えることができた。■各所と協力、情報共有を図りながら、丁寧に対応することができた。■自分なりに丁寧に対応することができた。■何かあれば、早く対応することができた。	■要望・意見を聞くことはできたが、活用するまでには至らなかった。また、こちらの事情の説明に終始して、改善・改革につなげていくことはできなかった。■保護者から得られた声は学年・校種を越えて、全員で共有すべきである。■特定の学年・学級のみが認められるというケースは不信感を生んでしまうので、学校・学年での対応の共有が必要である。■要望の多様化・対応範囲外の要求に、どこまで対応すべきかを考えるべきである。
		ホームページ・Classi等で積極的に学校・学年・学級・クラブ等の情報発信ができたか。	B	■長聖通信・学年通信・学級通信を通して、学校・クラスの様子を保護者の方々に知っていただくことができた。■学級通信を配布して、Classiでも普段の様子を伝えることができ、保護者からは、情報を伝えてもらって助かりますという言葉をいただいた。■定期的に学級通信を作成して、全職員にも見てもらえるようにClassiにも載せることができた。■学級通信等を通して、連絡事項等もなるべく保護者に発信するように心掛けた。	■クラスによって、通信の発行等に差が出てしまっている現状を打開するための手立てを実施することができなかった。■学年・クラスの課題点を、保護者の方と共にもっと綿密に共有し合えれば良かった。■学年行事等をもっと積極的に保護者の方に情報共有できれば良かったと思う。■館からの方針・希望を含むメッセージをより発信して、保護者の理解・共感を得られるように働きかけたい。